

4 . あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。

Oupw mecrij aiḡatoj **antikatesthte** proj thn amartian antagwnizomenoiÅ

not yet untill

antikaqisthmi

kaqisthmi

Pt.pr. : carry on a contest, struggle against, contend

(1) 他 place against;

立てる、任命する struggling against evil

(2) 自(2aor.) withstand, resist (HE 12.4).

do everything possible against, fight against(HE12.4)

説教

イエスさまは私たちの救いのために十字架で血を流してくださいました。

その救いにあずかった旧約の聖徒たちも、死に至るまで忠実に主に従い抜いてキリストの栄光をあらわしました。

彼らは、天に望みを置き、地上のあらゆる苦難を耐え忍んで主に従いました。

「釈放されることを願わないで拷問を受け」、

「あざけられ、

むちで打たれ、

さらに鎖につながれ、

牢に入れられるめに会い、

またのこぎりで引かれ、

剣で切り殺され、

羊ややぎの皮を着て歩き回り、

乏しくなり、

悩まされ、

苦しめられ」、「荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。」(11:35-38)

4 . あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。

「抵抗する」と訳される言葉は、「～に対抗して立つ、逆らう、抵抗する」といった意味があります。

つまり、私たちが罪と滅びへ押し流さんと日々猛然と襲いかかる悪魔の攻撃を

満身創痕の身でしっかりと受け止めながら、いのちを賭け、からだを張って、全力で主に従い行くのです。

信仰は戦いです。

罪との戦いです。

しかも血を流すほどの戦いです。

私たちは、イエスさまを信じるまで戦いがあります。

そして、信じてからも、洗礼を受けるまで戦いがあります。

さらには、洗礼を受けるや、もっと激しい戦いを戦っていかねばなりません。

そうして、その戦いは、一生涯、死ぬまで続いていくこととなるのです。

キリスト者とは戦う人です。

罪と戦う人です。

悪魔と戦う人です。

戦う人とならねばなりません。

私たちはイエスさまを信じて完全に救われたけれども、しかし、未だ救いは完成していません。

私たちはイエスさまの血により罪を完全に贖われたけれども、未だ贖いは完成していません。

私たちは完成の途上にある者です。

そして救いの完成を目指して、全力で罪と戦っているのです。

地上の教会は「戦う教会」です。

16世紀の宗教改革者が考えたように、

生きている教会は絶えず自らを改革し続けなければなりません。

その意味で、私たちキリスト者は、何より「改革者」でなければなりません。

自らを改革し、教会を改革し、さらには世界を改革するのです。

罪の世を改革するために、私たちは「戦う」のです。

キリスト者生活の基本はこの「ファイティング・スタイル」にあるということを肝に銘じましょう。

それでは、具体的に、私たちはどのような戦いを覚悟しなければならないのでしょうか。

まずは、自分自身を改革することです。

自分の内に巣くう罪と戦わなければなりません。

日々罪を悔い改めてみことばに従うよう、全力を尽くさねばなりません。

自分は良くやっていると自己満足してはなりません。

あるいは、自分は主に従いきれません、無理です、と諦めてはなりません。

そうではなく、私たちは、戦わなければなりません。

罪と戦わなければなりません。

より高いレベルを目指して、自己改革をしなければなりません。

みことば中心に、自分の生活を改革しなければなりません。

神と人を愛するよう、努力しなければなりません。

十戒を守って生活するよう、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして」精一杯の努力をしなければなりません（申命記 6:5）。

「主の日」を守るのがままたらないからといって、

それを（仕事が大変だからとか勉強が大変だからとか）勝手に自己弁護したり自己満足してはなりません。

あるいはどうせできないからと勝手に諦めてはなりません。

戦わなければなりません。

主の日を守る戦いを、戦わなければなりません。

優先すべきを優先し、捨てるべきものをキッパリと捨てなければなりません。

安息日は「自分のため」の世俗の仕事を休んで、教会に足を運び、神さまを礼拝し、交わりをし、良き主のわざに励まねばなりません。

そうするよう、自分の生活を改革しなければなりません。

六日間のうちに「自分の」すべての働きをことごとくなし終えて、主の日は一日いっぱい喜んで主に仕えなければなりません。

また、十分の一の献金を捧げることも同じです。

様々な自分の都合で全収入の十分の一を神さまに捧げることが難しいからといって、それで捧げなくてよいというものではありません。

私たちにどういう事情があるうとも、聖書は「十分の一は主のものだ」と言います。

十分の一を捧げぬ者に対して、「あなたがたは盗んでいる、わたしのものを盗んでいる」と神さまは容赦なく言われます。

神のことは、全世界のすべての者に、例外なく、平等に、語られているのです。

ですから、十分の一の捧げ物を捧げることを諦めてはなりません。

どうせ捧げられないと開き直ってはなりません。

「牧師さん、そんなこと言っても、こっちにもいろいろと事情があるんですよ」と勝手に自己弁護してはなりません。

あるいは、自分と同じ十分の一を捧げていない人の話を聞きながら、まあこんなもんでいいやと勝手に自己満足してはなりません。

戦わなければなりません。

主のものを盗まない戦いを戦わなければなりません。

私たちは自分ひとりで生きているわけではありません。

人の前に生きるのでもありません。

神さまの前に生きるのです。

人前に生きる以前に、神の前に生きるのです。

自分の目にどうか、人の目にどうかということではなくて、神さまの目にどうかということを実際に考えなければなりません。

人目を気にして生きることは信仰ではありません。

信仰は、目に見えないものを確信させるものなのです。

目に見えないものとは、神のことはです。

神の約束です。

そして、ヘブル書の記者が言うように、神のことは信じて、信仰によって生きることは、すなわち「戦い」を意味するのです。

貧しく、苦しく、ムチで打たれ、投獄され、石で打たれ、のこぎりで引かれ、剣で切り殺されることを覚悟しなければなりません。

イエスさまは十字架に磔にされて「はずかしめ」を受けられました。

「はずかしめ」を受けたということの意味は、

単に十字架に磔にされて殺されて肉体の痛みを受けたというにとどまらず、

神としての誇りも栄光も完全に地に落ちて踏みつけられて傷つけられた、ということの意味します。

例えば、誰かが病死したと言えはその死は決して恥ずかしい死とはならないし時には美談を残して語り上げられるかも知れません。

しかし、悪いことをして極刑に処されて刑死したとなれば、それは誰にも言えないほど恥ずかしいこととなります。

「忌み嫌われる死」です。

人間なら誰もが「死にたくない死」です。

「死」にもいろいろと種類があって様々な死に方があるけれども、でもその中でも最も「死にたくない死」です。

「最低の死」です。

「最悪の死」です。

この地上で人間が最も嫌なことが「死」であるとするならばその「死」の中でもこれまた最も忌むべき「死」、それが十字架の死です。

しかし、そのような、私たちがこの地上で最も忌み嫌う十字架の死をも、イエスさまはものともせず「喜んで」死なれた、

これが信仰の力なのです。

悪魔との戦いに勝利させてみこころを行わせる神の全能の力、それがみことばを信じる信仰の力なのです。

私たちは、神のことは信じて、悪魔と戦います。

私たちは、神のことは信じて、罪と格闘するのです。

話を元に戻します。

私たちは、他にどのような戦いをしなければならないのでしょうか。

偶像崇拜との戦いがあります。

日本では、先祖崇拜との戦いです。

他人の葬儀で出れば、そこで焼香という偶像崇拜の強要との戦いがあります。

戦時中は、国家権力による神社参拝強制との戦いでした。

今日では、公立学校の教育現場に於ける「日の丸・君が代」強制との戦いです。

「君が代」を歌わぬ教師はクビになります。

「君が代」を生徒たちに歌わせぬ教師もクビになります。

最近の都教委の通達では、受け持ちの生徒が歌わない場合、その担任教師が処罰されます。

「日の丸」は「太陽神天照大神」を意味すると教育された歴史を持つ、れっきとした偶像ですよ。

戦時中は、

それを無理矢理拝ませ、天皇に絶対忠誠を誓う「君が代」を歌わせて、片っ端から一人残らず侵略戦争に動員していったのです。

みなさん、自分の信仰を守るといって一つ取っても、そこにはどんなに大きな戦いがあることでしょうか。

黙っていたら、公の権力がどんどんと私たちの信仰に介入してくるのです。

そして、私たちの内面を支配し、思いのままに操って、人間の欲を追求する戦争に動員しようとするのです。

そのような悪魔の誘惑に私たちは打ち勝たねばなりません。

みなさん、私たちは、人の心を支配することはできません。

内面の自由を侵すことはできないのです。

思想・良心の自由、信教の自由というものは、無条件の絶対的な自由です。

誰もこれを侵すことはできません。

人の信仰に介入も干渉もできません。

しちゃんらないのです。

しちゃんらないのに、国家権力が、会社が、学校が、あるいは両親が、親戚が、これを抑圧しようとしてきます。

だから、私たちは、絶えずこのような攻撃と戦って、自分の信仰を守っていくのです。

そうでなければ、自分の信仰を守ることはできません。

ですから、第一戒、二戒の戒めを守るには、本当にいのち賭けの戦いを覚悟しなければなりません。

村人から村八分にされ、親から勘当され、非国民と呼ばれ、

職場を追放され、時には殺されるという戦いを覚悟しなければならないのです。

同様に、「姦淫してはならない」、この戒めを守るために、どんなに激しい戦いを覚悟しなければならないでしょうか。

売春、婚前交渉、不倫が当たり前の「この姦淫と罪の時代」にあって、私たちが悪魔の誘惑を振り切って、

聖くひとりの人を一生愛して添い遂げるには、どんなに血を流す戦いを覚悟しなければならないでしょうか。

一つの自分の家庭を守るためには、どんなに果てしない戦いを絶え間なく経験していかなければならないことでしょうか。

「殺してはならない」、この戒めを守ることも今日いよいよ困難となっています。

イラク戦争の中止を訴えて署名を集めた高校生に、小泉首相は「国際性がない」と言って憤りをあらわにしたそうです。

戦争反対のピラを自衛隊の官舎にまいた人が即座に逮捕され、有罪判決を受けました。

ひとりの共産党員の公務員を、警官が六十人態勢で日夜つけ回し、党のチラシを貼っている現場を押さえて逮捕しました。

今日「戦争反対」を叫ぶことは、まさにいのち賭けの現実となっております。

「父と母を敬え」

これもそうです。

自分の親を敬うことにも絶え間ない葛藤があります。

「嘘をつくな」

これもそうです。

どんなに馬鹿を見ても、嘘をつかず正直に生きなければなりません。

「貪ってはならない」

どんなに困難な生活の中でも、神さまが与えてくださったものに心から満足し、感謝して生活しなければなりません。

このように、神と人を愛して生きるには、戦いがあります。

戦わずして、神も人も愛することはできません。

「愛する」ことは「戦う」ことなのです。

以上、私たちがどのような戦いをしなければならないか、まずは自分の内にある罪と戦わなければならないことをお話ししました。

次に、私たちが戦わなければならない戦いはどういう戦いでしょうか。

それは、教会を改革する戦いです。

教会に巣くう罪と戦わなければなりません。

つまり、仮に自分自身は十戒を守って生活していたとしても、

自分以外の教会の兄弟姉妹が十戒を破り罪を犯して生活している場合、

彼らをしてその罪を悔い改めさせ、彼らが主に従って生きるよう、導き助けなければなりません。

これもまた壮絶な罪との格闘を覚悟しなければならないことです。

彼らが、自分と同じように、

偶像を拝まず、主の御名をあがめ、安息日を聖く守り、父と母を敬い、

人を殺さず、姦淫せず、盗まず、嘘をつかず、貪らないで生きるよう導かねばなりません。

これもまた激しい戦いを覚悟しなければなりません。

人の罪と関わる働きは、本当に骨の折れるものです。

罪人に真理を伝えたら、罪人が逆上して逆襲してくるんですよ。

イエスさまはそれでいのちを落としました。

教会を改革するために死なれたのです。

十六世紀宗教改革もいのちがけの作業でした。

私はと思いますが、この地上で最も困難な仕事は、罪人を悔い改めさせることだと思います。

人にみことばを伝えて罪を悔い改めさせ、改心させる、そんなことができたら、それこそ奇跡だと思います。

イエスさまは

「人の子は罪人を招いて悔い改めさせるために来た」と言い、それがイエスさまの生涯の本質であることを明らかになさいました。

そこにまた私たちの戦いもあります。

私たちは、キリストの教会が神の栄光をあらわすよう教会を改革し、教団を改革しなければなりません。

そして、さらに、私たちはこの世界を改革しなければなりません。

世界に巣くう罪と戦わなければなりません。

彼らが、偶像を拝まず、主の御名をあがめ、安息日を聖く守り、父と母を敬い、

人を殺さず、姦淫せず、盗まず、嘘をつかず、貪らないで生きるよう導かねばなりません。

これは本当にいのち賭けの戦いを覚悟させられることです。

何度も言いますが、クリスチャンは何より「戦う人」でなければなりません。

ただ世の流れに迎合し、

薄笑いを浮かべながら、

人と摩擦を起こさないよう、罪と妥協して生きる「お人好し」であってはなりません。

クリスチャン生活の基本は「ファイティング・スタイル」にあるということをしっかりと銘記しましょう。

ヘブル書の記者は、

「あなたがたはまだ、

罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。」と言いました。

この教会は、初期の頃、「苦難に会いながら、激しい戦い」を経験したことがあります。

人々のさらし者になって、「そしりと苦しみを受けた者」もありました。

「財産を没収」された人もありました。

でも、「罪と戦って、血を流すまで抵抗したこと」はなかったのです。

「血を流すまで」とは、(少なくともこれまでのヘブル書での用法によると)「死ぬ」と言うことになるでしょう。

つまり、どんなに貧しくても、どんなに苦しくても、でもまだ死んでいないじゃないか、ということです。

どんなに苦しくても、死ぬほど苦しくても、でもまだ死んでいないじゃないか、

「死にそうでも、まだ生きている」、まだ「死ぬほど」罪に抵抗していないじゃないかということです。

「あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。」

「あなたがたはまだ、罪と戦って、死ぬまで抵抗してないじゃないか。」

このみことばを肝に銘じ、

古の聖徒たちのように、

罪から救われ、生かされているこのいのちをもって、感謝と喜びをもって罪と戦っていきたいと願います。

ここに集うみなさん一人一人が、

あらゆる艱難を耐え、悪魔との死闘に打ち勝ってみこころを行い、

この地上に神の栄光をあらわして生きていかれるよう主の御名によってご健闘を祈ります。